

## 8 校内研修の取組

各学校において発達障害等のある児童生徒一人ひとりの実態に即した適切な指導及び必要な支援を進めるためには、校内委員会や事例検討会等を活用した、計画的・組織的な相談支援を進める必要があり、そのためには、一人ひとりの教員の指導力はもちろん、学校組織の課題解決力の向上が重要です。

校内コーディネーターは、研修を担当する分掌と連携して、発達障害等の理解や保護者への支援等に関する演習、ロールプレイや疑似体験等を取り入れるなど、各学校の実情に合わせた校内研修を計画的に実施することが求められます。

### 計画的な校内研修の開催（例）

段 階	内 容 等
基礎的な体制づくりの段階	特別支援教育や発達障害等の理解 ・ 講義演習 ・ 疑似体験やロールプレイ 等
具体的な支援の段階	個々のケースへの対応 ・ 校内委員会や事例検討会の在り方 ・ 「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」の作成等
実効性の向上をめざす段階	特別支援教育の視点を取り入れた授業実践 ・ 指導案の検討 ・ 授業研究 等

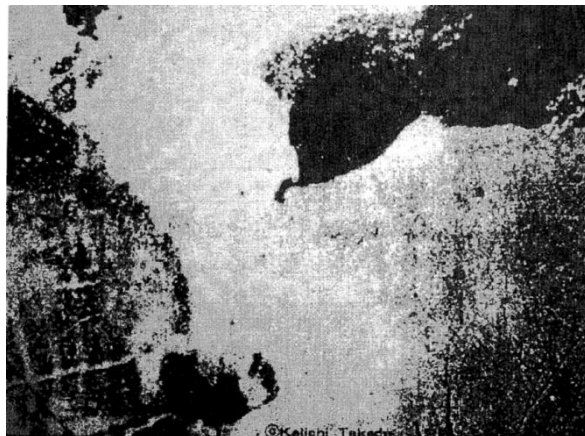
#### 事例1 発達障害の認知特性の疑似体験

- ・ 発達障害のある子どもは、物事の見方、捉え方、感じ方などに他の児童生徒とは少し違う場合がある。
  - ・ 発達障害のある子どもは、個別の場面よりも一斉や集団での場面の中でつまずきや困難を示している場合が多く見られる。
  - ・ 学習活動等において、できることとできないことのギャップが大きいため、教員からは、能力的な遅れや偏りが分かりにくい（発見されにくい・認められにくい・理解されにくい）。
  - ・ うまく取り組めない要因を「わがまま」や「努力不足」「意欲のなさ」等と受け止められがちである。
  - ・ 支援がないままに見過ごされていたり、無理強いするような対応が続くと、状態が改善されない場合も多く見られる。
- ※ 先生方を説得するというよりも、発達障害のある子どものつまずきや気持ちについて、体験を通して、理解してもらえよう内容から取り組む。

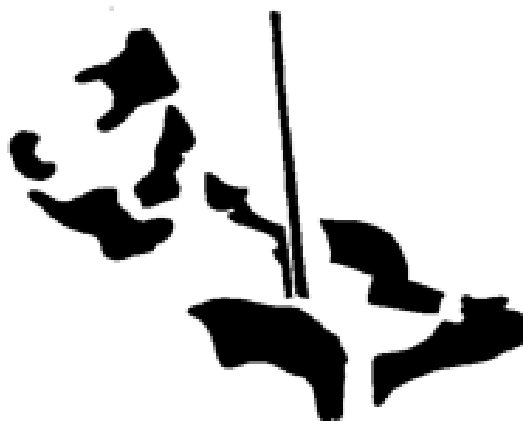
疑似体験 1

何が見えますか。

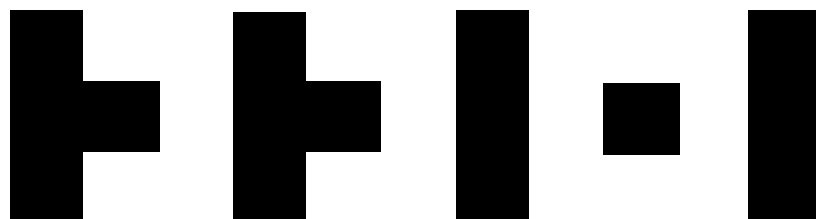
ア



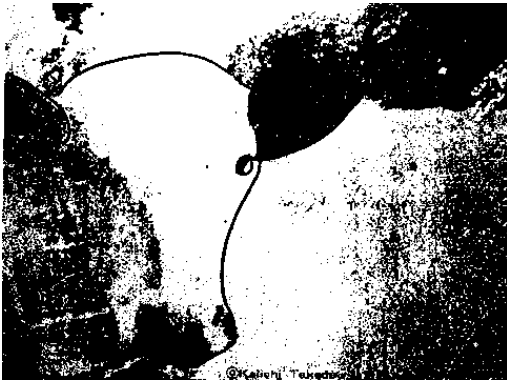
イ



ウ 読んでください。



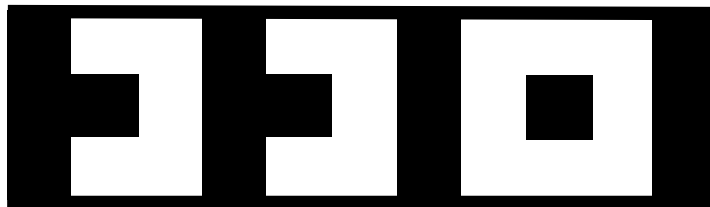
## ア 牛の顔



## イ バイオリンを弾く人



## ウ ココロ



### <ポイント> 認知特性の理解

○ 視機能には、視力と視覚がある。

- (1) 入力機能 ①感覚（視力） ②両眼視 ③眼球運動  
(2) 情報処理機能（イメージ認識力・イメージ記憶力・イメージ操作力等）  
(3) 出力機能（微細運動・粗大運動）



(例)

- ・ 黒板の文字や手元の本などの文字などをはっきりと見る（視力）。
  - ・ 黒板（遠く）とノート（手元）に視線を交互に動かす（眼球運動）。
  - ・ ざっと見ながら（scan）目標物を見つけ、それに集中（attend）できる（情報処理）。
  - ・ バックグラウンド（地：ground）を適当に無視しながら、見るべき物（図：figure）を見つけ集中できる（情報処理）。
- ・ 見えていても視覚的に認知できなければ、いくら見ても分からない。
  - ・ 認知できていないときに「よく見なさい。」という指示は効果的ではなく、子どもに過度な負担となることもある。
  - ・ 認知できていないときは、一度、答え（見方・考え方・学び方）を教えるから、再度、見せる（考えさせる）など、見方、考え方、学び方を学習させてから練習（ドリル）を行うなどの支援をする。

## 疑似体験 2

## 覚えてください。

第1問 = A図

第2問 = B図

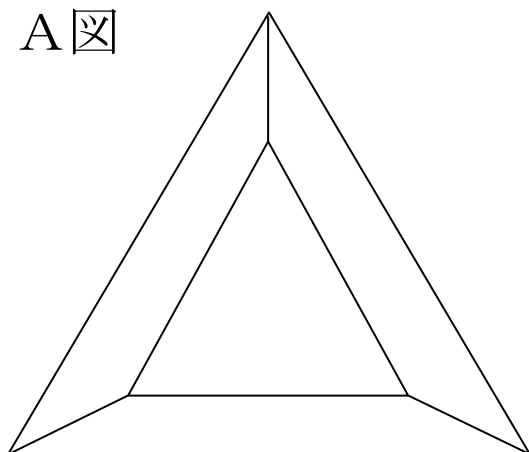
(1) まず、A図について出題する。

- ① 10秒間で覚えてもらう。10秒たったら、図形を隠す。
- ② 覚えた図形を思い出して書いてもらう。(おそらく、全員正解できる。)

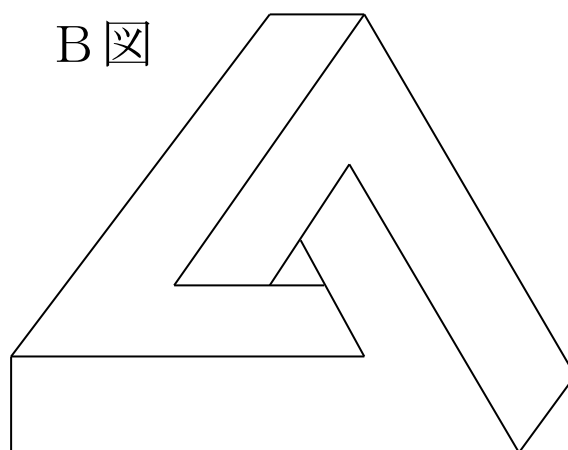
(2) 次に、B図について出題する。

- ① 10秒間で覚えてもらう。10秒たったら、図形を隠す。
- ② 覚えた図形を思い出して書いてもらう。
- ③ 視写してもらう。
- ④ 100回書けば覚えられるか試す。
- ⑤ 児童生徒が覚えやすくなるコツを考えるとともに、どのような配慮が必要かを検討する。

A図



B図



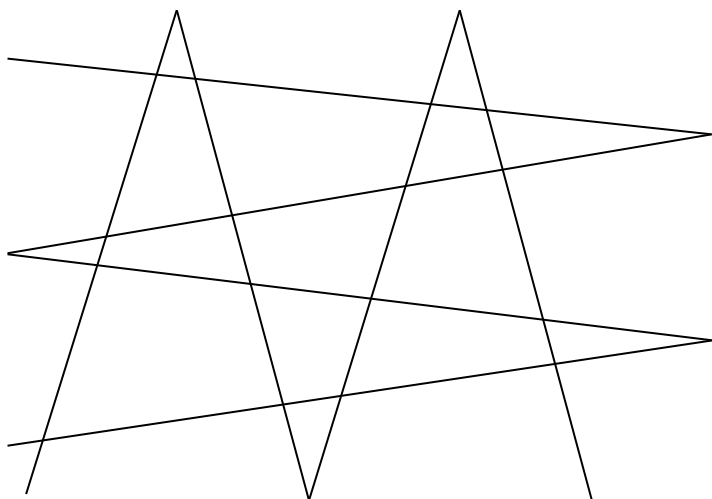
### <ポイント> 認知特性の理解

- ・ B図は、現実的に不可能な図形のため、理解しづらい（覚えにくい、視写が難しい）。
- ・ 簡単な図形もLD等の発達障害のある子どもには、上図のような理解しづらい状況が生じている場合がある。
- ・ 視覚機能の要因による困難であるため、努力だけでは解決しない場合が多い。
- ・ 100回書いても覚えられない。努力不足ではない。認知特性に合わせた指導が必要である。
- ・ クラスのほとんどがA図を書いているときに、一人だけB図を書いているときの児童生徒の心情を想像する。

## 疑似体験 3

写してください。

- ① 図を視写してもらおう。
- ② どうやって書いたかを発表してもらおう。
- ③ 解説する。

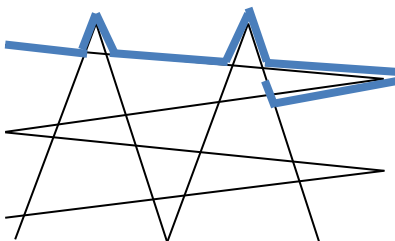


### <ポイント> 認知特性の理解

- ・ 視覚機能に困難がない場合、2種類のMの重なりと認知する。



- ・ 図：figureの構造が理解できないLD等の発達障害のある子どもの場合、下図のような書き方をすることがある。



- ・ 文字の認知が難しくなる（書くことが困難になる。）。)

## 疑似体験 4 簡単な計算問題をしましょう。

- ① 2種類の問題用紙を準備する（問題Bの用紙は、数枚のみ）。

問題A

$2 + 3 =$

$4 \div 2 =$

$5 - 1 =$

問題B

*	▼	✖	■
♪	◇	*	■
★	〒	☆	■

1	☆
2	*
3	✖
4	♪
5	★
+	▼
-	〒
×	○
÷	◇
=	■

\* 表示方法が異なる同じ内容の問題

- ② 問題Bの用紙を問題Aの中にランダムに混ぜる。  
誰が、問題Bに当たるか分からないように（裏にして）配布する。
- ③ 一斉に始める。
- ④ 以下のような指示や声かけをする。  
「簡単な四則計算なので、皆さん、すぐにできると思います。」  
「できた人から『できました』と大きな声で、手を挙げて知らせてください。」  
挙手があったら、「～さん、早いですね。」  
「～さんもできましたね。」  
「皆さん、どんどんできていますね。」  
「皆さん、あっという間でしたね。簡単すぎましたかね。」  
時間がかかっている人に「～さん（問題B）は、まだできませんか？」  
「～さん（問題B）は、足し算や引き算は、苦手ですか。」  
「～さん（問題B）は、どうして、そんなに時間がかかるのかな？」
- ⑤ 問題Bに当たった人の感想を発表してもらおう。

### <ポイント> LD等の発達障害のある子どもの気持ちの理解

- ・友達がみんなできている中で、自分だけができない状況にある子どもの気持ちを考える。
- ・疑似体験は一時的なものであるが、LD等の発達障害のある子どもは毎日の経験することになる。
- ・「わかった人は手を挙げて」「よくできました」などの何気ない一言が自信を喪失している子どもの心を傷つけたり、意欲を失わせてしまったりする可能性があるということ意識することが重要である。

## 事例2 小学校の通常の学級におけるビデオを活用した授業研究

- 校内研修で特別支援教育の視点を加えた授業研究を行った。
  - ① 校内コーディネーターが「どの子どもも『わかる・できる』授業づくり」の基本的な考え方や視点について説明。
  - ② 研修部と連携し、授業研究を行う。

### <授業研究>

- 授業研究では、特別な教育的支援が必要な児童への支援について、以下の意見が出された。

- ① 整理が苦手、注意散漫な児童には、必要なものだけを準備させる。
- ② 集中時間が短い児童には、座る(聞く)→立つ(読む)→座る(書く)等の変化のある活動を仕組む。
- ③ 聞いて理解することが苦手な児童には、指示を簡潔にする。  
(短く、ゆっくりと、具体的に)
- ④ 見通しがもてない児童には、1単位時間の流れをパターン化する。目次を示す。
- ⑤ 刺激に反応しやすい児童には、掲示物等の教室環境への配慮を行う。
- ⑥ イメージをもちにくい児童には、視覚的な手がかりを示す。
- ⑦ 集中時間が短い児童には、適宜、挙手や拍手等で活動に参加させる。
- ⑧ 話すことが苦手で自信のない児童には、ペア学習から始める。
- ⑨ 自己評価や自尊感情が低く、自信のない児童には、友達同士の相互評価による認め合いを行う。

### <授業後の取組>

- ビデオ撮影したものを、校内コーディネーターが地域コーディネーターと話し合い、上記の視点から編集して、校内研修で活用した。
- ビデオや写真を取り入れた研修は、参加した教員にとって、イメージがもちやすく分かりやすい研修になった。
- 児童が苦手とすることや困難さについて、疑似体験を交えた研修を同時に行うことで、授業改善の必要性をより実感できた。
- ビデオ撮影では、教室の前から児童の表情や言動を撮る。

「この授業では児童のこのような様子が見られた。次回、このような取組をすれば、更にこのような姿が見られるのではないか。」等、児童の学びを通して、建設的な意見を引き出す。

※ 教員の指導・支援について協議が批判的にならないように、お互いが、よりよい支援や配慮の方法を見つけるという気持ちで臨むようにしましょう。